月の夜

樋口一葉

村雲（むらくも）すこし有るもよし、無きもよし、みがき立てたるやうの月のかげに尺八の音（ね）の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし、三味（さみ）も同じこと、琴（こと）は西片町（にしかたまち）あたりの垣根ごしに聞たるが、いと良き月に弾く人のかげも見まほしく、物（もの）がたりめきて床（ゆか）しかりし、親しき友に別れたる頃の月いとなぐさめがたうも有るかな、千里（ちさと）のほかまでと思ひやるに添ひても行かれぬものなれば唯うらやましうて、これを仮（かり）に鏡となしたらば人のかげも映（うつ）るべしやなど果敢（はか）なき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水（いけみづ）にゆられて見ゆるかげ物いふやうにて、手すりめきたる処（ところ）に寄りて久しう見入るれば、

はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく、此池(このいけ)の深さいくばくとも測(はか)られぬ心地(こゝち)に成(なり)て、月は其(その)そこの底(そこ)のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ、久しうありて仰(あふ)ぎ見るに空なる月と水のかげと孰(いづ)れを誠(まこと)のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれど箱庭(はこには)に作りたる石一(いしひと)つ水の面(おも)にそと取落(とりおと)せば、さゞ波すこし分れて是れにぞ月のかげ漂(たゞよ)ひぬ、斯(か)くはかなき事して見せつれば甥なる子の小さきが真似て、姉さまのする事我れもすとて硯(すゞり)の石いつのほどに持(も)て出(い)でつらん、我(わ)れもお月さま[#「お月さま」は底本では「おさま」]砕(くだ)くのなりとてはたと捨(す)てつ、それは亡(な)き兄の物なりし

を身に伝へていと大事と思ひたりしに果敢なき事にて失ひつる罪得がましき事とおもふ、此池かへさせてなど言へども未ださながらにてなん、明ぬれば月は空に還りて名残もとゞめぬを、硯はいかさまに成ぬらん、夜な〳〵影や待とるらんと憐なり。嬉しきは月の夜の客人、つねは疎々しくなどある人の心安げに訪ひ寄たる、男にても嬉しきを、まして女の友にさる人あらば如何ばかり嬉しからん、みづから出るに難からば文にてもおこせかし、歌よみがましきは憎きものなれどかゝる夜の一言には身にしみて思ふ友とも成ぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、汽車の笛の遠くひゞきたる

も、何（なに）とはなしに魂（たましひ）あくがるゝ心地（こゝち）す。

底本：「日本の名随筆58　月」作品社
１９８７（昭和62）年８月25日第１刷発行
１９８９（平成１）年１月25日２刷
底本の親本：「一葉全集　後篇」博文館
１９１２（大正１）年６月
入力：葵
校正：もりみつじゅんじ
２０００年11月６日公開
２００５年６月28日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。